

本科 2 期 10 月度

解答

Z会東大進学教室

選抜東大クラス文系数学

東大文系数学

難関大文系数学 T



17章 代数 (4)

問題

【1】示すべき不等式について、右辺から左辺を引いた差が非負であることを示す。

$$\begin{aligned}
 & f\left(\frac{x_1+x_2}{2}\right) - \frac{f(x_1)+f(x_2)}{2} \\
 &= \sin \frac{x_1+x_2}{2} - \frac{1}{2}(\sin x_1 + \sin x_2) \\
 &= \sin \frac{x_1+x_2}{2} - \sin \frac{x_1+x_2}{2} \cos \frac{x_1-x_2}{2} \quad (\because \text{和積の公式}) \\
 &= \sin \frac{x_1+x_2}{2} \left(1 - \cos \frac{x_1-x_2}{2}\right)
 \end{aligned}$$

ここで $0^\circ \leq x_1 \leq 180^\circ$, $0^\circ \leq x_2 \leq 180^\circ$ だから、

$$0^\circ \leq \frac{x_1+x_2}{2} \leq 180^\circ \quad \therefore \sin \frac{x_1+x_2}{2} \geq 0$$

また、任意の角 x_1, x_2 について

$$1 - \cos \frac{x_1-x_2}{2} \geq 0$$

よって

$$\sin \frac{x_1+x_2}{2} \left(1 - \cos \frac{x_1-x_2}{2}\right) \geq 0$$

が成り立つから、

$$\therefore \frac{f(x_1)+f(x_2)}{2} \leq f\left(\frac{x_1+x_2}{2}\right) \quad [\text{証明終}]$$

<別解>

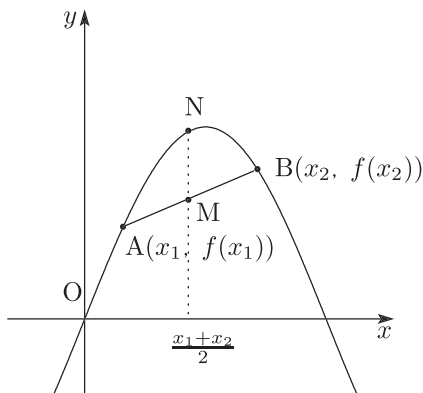
$y = \sin x$ のグラフを $0^\circ \leq x \leq 180^\circ$ の範囲で考えると、この範囲で上に凸だから
点 $A(x_1, f(x_1))$, $B(x_2, f(x_2))$

の中点を M とすれば、

$$M\left(\frac{x_1+x_2}{2}, \frac{f(x_1)+f(x_2)}{2}\right)$$

である。

図 1: $\sin x$ の凸性



ここで $y = f(x)$ 上の点 N を

$$N\left(\frac{x_1+x_2}{2}, f\left(\frac{x_1+x_2}{2}\right)\right)$$

とすると、M の y 座標は N の y 座標に比べて、等しいか小さい。よって示された。

[証明終]

【2】 まず、 $x \geq y, z \geq w$ とすると

$$\begin{aligned}(xz + yw) - (xw + yz) &= (z - w)x - (z - w)y \\ &= (z - w)(x - y) \geq 0, \\ \therefore xz + yw &\geq xw + yz \cdots \cdots (\#)\end{aligned}$$

であることに着目する。

b_i, b_j, b_k の並び方について、次のように場合を分ける：

Case 1. $(ijk) = (132), (321), (213)$ のとき、つまり、 (ijk) が (123) から 2 つのものの交換によって得られるとき。(これを『互換によって得られる』と言う。『1 個が自然な位置にある』という言い方もできる。)

Case 2. $(ijk) = (231), (312)$ のとき、つまり、 (ijk) が (123) から巡回によって得られるとき。(これを『巡回置換によって得られる』と言う。『自然な位置にあるものが存在しない』とも言える。)

$N = a_1b_1 + a_2b_2 + a_3b_3$ とする。

Case 1. (ijk) が (123) から互換で得られるとき。

例えば $(ijk) = (213)$ のとき、 $(\#)$ によって
 $a_1b_1 + a_2b_2 \geq a_1b_2 + a_2b_1$

が成り立つ。この両辺に a_3b_3 を加えれば、

$$N = a_1b_1 + a_2b_2 + a_3b_3 \geq a_1b_2 + a_2b_1 + a_3b_3$$

となる。 $(ijk) = (321), (132)$ の場合も同様に示される。

従って、 (123) に互換を施して (ijk) が得られるとき、示すべき式が成り立つ。

Case 2. (ijk) が (123) から巡回置換で得られるとき。

● $(ijk) = (231)$ のとき、示すべき式は

$$a_1b_2 + a_2b_3 + a_3b_1 \leq a_1b_1 + a_2b_2 + a_3b_3 = N$$

である。まず左辺の第 1 項と第 3 項について、 $b_1 \geq b_2$ と $(\#)$ より

$$a_1b_2 + a_3b_1 \leq a_1b_1 + a_3b_2,$$

$$\therefore a_1b_2 + a_2b_3 + a_3b_1 \leq a_1b_1 + a_2b_3 + a_3b_2 \cdots \textcircled{1}$$

が成り立つ。ところがこの右辺の第 2 項と第 3 項について、Case 1 で示したように

$$a_2b_3 + a_3b_2 \leq a_2b_2 + a_3b_3,$$

$$\therefore a_1b_1 + a_2b_3 + a_3b_2 \leq a_1b_1 + a_2b_2 + a_3b_3 = N \cdots \textcircled{2}$$

が成り立つから、 $\textcircled{1}$ と $\textcircled{2}$ によって

$$N = a_1b_1 + a_2b_2 + a_3b_3 \geq a_1b_2 + a_2b_3 + a_3b_1$$

が成り立つ。

- $(ijk) = (312)$ のとき, 示すべき式は

$$a_1b_3 + a_2b_1 + a_3b_2 \leq a_1b_1 + a_2b_2 + a_3b_3 = N$$

である. まず左辺の第 1 項と第 2 項について, $b_1 \geq b_3$ と (#) より

$$a_1b_3 + a_2b_1 \leq a_1b_1 + a_2b_3,$$

$$\therefore a_1b_3 + a_2b_1 + a_3b_2 \leq a_1b_1 + a_2b_3 + a_3b_2 \cdots \textcircled{3}$$

が成り立つ. ところがこの右辺の第 2 項と第 3 項について, Case 1 で示したように

$$a_2b_3 + a_3b_2 \leq a_2b_2 + a_3b_3,$$

$$\therefore a_1b_1 + a_2b_3 + a_3b_2 \leq a_1b_1 + a_2b_2 + a_3b_3 = N \cdots \textcircled{4}$$

が成り立つから, ③と④によって

$$N = a_1b_1 + a_2b_2 + a_3b_3 \geq a_1b_3 + a_2b_1 + a_3b_2$$

が成り立つ.

以上, Cases 1, 2 によって, (123) の任意の並べ替え (ijk) について,

$$N = a_1b_1 + a_2b_2 + a_3b_3 \geq a_1b_i + a_2b_j + a_3b_k$$

であることが示された. [証明終]

【3】 題意より $\sqrt{2x+y} > 0$ であるから、

$$\sqrt{x} + \sqrt{y} \leq k\sqrt{2x+y} \iff \frac{\sqrt{x} + \sqrt{y}}{\sqrt{2x+y}} \leq k \quad \dots (\#)$$

求めるものは (#) が任意の整数 x, y で成り立つような k の最小値であるから、 $\frac{\sqrt{x} + \sqrt{y}}{\sqrt{2x+y}}$

の最大値を求める。ここで、コーシー・シュワルツの不等式

$$(a^2 + b^2)(c^2 + d^2) \geq (ac + bd)^2 \quad (\text{等号成立は } ad = bc \text{ のとき})$$

を用いることを考える。この不等式において

$$a = \frac{1}{\sqrt{2}}, \quad b = 1, \quad c = \sqrt{2x}, \quad d = \sqrt{y}$$

と置くと

$$\frac{3}{2}(2x+y) \geq (\sqrt{x} + \sqrt{y})^2 \iff \sqrt{x} + \sqrt{y} \leq \sqrt{\frac{3}{2}(2x+y)}$$

$$\therefore \frac{\sqrt{x} + \sqrt{y}}{\sqrt{2x+y}} \leq \sqrt{\frac{3}{2}}$$

等号は

$$ad = bc \iff \sqrt{\frac{y}{2}} = \sqrt{2x} \iff y = 4x$$

のときに成立するから、 $\frac{\sqrt{x} + \sqrt{y}}{\sqrt{2x+y}}$ の最大値は $\sqrt{\frac{3}{2}}$ である。

以上より、(#) が成り立つ条件は

$$k \geq \sqrt{\frac{3}{2}}$$

であるから、求める k の最小値は

$$\sqrt{\frac{3}{2}} = \frac{\sqrt{6}}{2} \quad (\text{答})$$

<別解>

$y > 0$ なので、不等式は

$$\frac{\sqrt{x}}{\sqrt{y}} + 1 \leq k\sqrt{\frac{2x}{y}} + 1$$

と変形できる。 $\sqrt{\frac{x}{y}} = t$ と置くと $t > 0$ である。ここで、 k は明らかに正なので、両辺2乗しても同値であることに着目する。

すると、求めるものは

$$(t+1)^2 \leq k^2(2t^2+1) \iff (2k^2-1)t^2 - 2t + k^2 - 1 \geq 0 \quad \dots \textcircled{1}$$

が、 $t > 0$ であるすべての t で成立するような k の最小値である。

いま、 $\textcircled{1}$ の左辺を $f(t)$ とおくと、 $t > 0$ であるすべての t で $f(t) \geq 0$ が成立するためには

$$f(0) = k^2 - 1 \geq 0 \quad \therefore k \geq 1$$

が必要である。

このとき

- $f(t)$ の 2 次係数について, $2k^2 - 1 > 0$
- $y = f(t)$ のグラフの軸について, $\frac{1}{2k^2 - 1} > 0$

であるから, 方程式 $f(t) = 0$ の判別式を D として

$$\frac{D}{4} = 1 - (k^2 - 1)(2k^2 - 1) = -2k^4 + 3k^2 \leq 0$$

が成り立てばよい.

$k \geq 1$ に注意して解くと

$$\frac{3}{2} \leq k^2 \quad \therefore \quad \frac{\sqrt{6}}{2} \leq k$$

よって, k の最小値は

$$\frac{\sqrt{6}}{2}$$

であり, このとき, $t = \frac{1}{2k^2 - 1} = \frac{1}{2}$ であるから, $t = \sqrt{\frac{x}{y}}$ より

$$4x = y$$

となる.

【4】与えられた方程式を変形して、条件

$$s^2 + t^2 = 1$$

を用いれば、次の4次方程式になる：

$$x^4 - 2(s+t)x^2 + 1 - 2st = 0 \quad \dots(\#)$$

$s+t=k$ と置けば、 $s^2+t^2=1$, $s \geq 0, t \geq 0$ より、

$$s = \cos \theta, t = \sin \theta, \quad 0 \leq \theta \leq \frac{\pi}{2}$$

とすることが出来る。sin への合成によって

$$k = s+t = \sin \theta + \cos \theta = \sqrt{2} \sin \left(\theta + \frac{\pi}{4} \right)$$

と変形され、 $\frac{\pi}{4} \leq \theta + \frac{\pi}{4} \leq \frac{3\pi}{4}$ より

$$\frac{1}{\sqrt{2}} \leq \sin \left(\theta + \frac{\pi}{4} \right) \leq 1 \iff 1 \leq k = \sqrt{2} \sin \left(\theta + \frac{\pi}{4} \right) \leq \sqrt{2}$$

である。

また、 s, t の対称式処理によって

$$(s+t)^2 = 1 + 2st = k^2 \iff st = \frac{k^2 - 1}{2}$$

であるから、方程式(#) $は$

$$x^4 - 2kx^2 + 2 - k^2 = 0 \iff k^2 + 2x^2k - x^4 - 2 = 0 \quad \dots(*)$$

となり、 k に関する2次方程式に変形される。従って問題の条件は、この

方程式(*)が $1 \leq k \leq \sqrt{2}$ をみたす解をもつような x の範囲を求めることに帰着される。

(*)の左辺を $f(k)$ として

$$f(k) = (k+x^2)^2 - 2x^4 - 2$$

であるから、放物線 $y = f(k)$ の頂点は第3象限にあり、従って

$$f(1) \leq 0 \quad \text{かつ} \quad f(\sqrt{2}) \geq 0$$

が必要かつ十分。

• $f(1) = -(x^2-1)^2$ であるから、 $f(1) \leq 0$ は常に成立。

• $f(\sqrt{2}) = -x^2(x^2-2\sqrt{2})$ より、

$$f(\sqrt{2}) \geq 0 \iff x^2 - 2\sqrt{2} \leq 0 \iff -\sqrt{2\sqrt{2}} \leq x \leq \sqrt{2\sqrt{2}}$$

を得る。

以上をまとめて、求める x の範囲は

$$-\sqrt{2\sqrt{2}} \leq x \leq \sqrt{2\sqrt{2}} \quad (\text{答})$$

添削課題

【1】 $f(a)$, $f(b)$ のうち大きくないほうを, $\min\{f(a), f(b)\}$, 小さくないほうを $\max\{f(a), f(b)\}$ とすると

$$m \leq f(a) \leq M, m \leq f(b) \leq M$$

より

$$m \leq \min\{f(a), f(b)\}, \max\{f(a), f(b)\} \leq M \cdots \cdots \textcircled{1}$$

ここで, $y = Ax + B$ について $a \leq x \leq b$ で

$$\min\{f(a), f(b)\} \leq Ax + B \leq \max\{f(a), f(b)\}$$

だから, これと $\textcircled{1}$ より

$$m \leq Ax + B \leq M$$

$$\therefore -M \leq -(Ax + B) \leq -m$$

これと $m \leq f(x) \leq M$ を加えると

$$-M + m \leq f(x) - (Ax + B) \leq M - m$$

$$\therefore -(M - m) \leq f(x) - (Ax + B) \leq M - m$$

$$\therefore |f(x) - (Ax + B)| \leq M - m \quad (\text{証明終})$$

18章 解析 (1)

問題

【1】与えられた第2式は、 $\{a_n\}$ を生成する漸化式である。そこで、いくつかの項を実際に求めてみて、一般項 a_n を推定し、その推定が正しいことを数学的帰納法により証明する。

• $n = 1$ として、

$$2 = a_1 a_2 + a_2 a_1 \quad \therefore a_2 = 1$$

• $n = 2$ として、

$$2 = a_1 a_3 + a_2 a_2 + a_3 a_1 \quad \therefore a_3 = \frac{1}{2}$$

• $n = 3$ として、

$$\frac{4}{3} = a_1 a_4 + a_2 a_3 + a_3 a_2 + a_4 a_1 \quad \therefore a_4 = \frac{1}{6}$$

• $n = 4$ として、

$$\frac{3}{2} = a_1 a_5 + a_2 a_4 + a_3 a_3 + a_4 a_2 + a_5 a_1 \quad \therefore a_5 = \frac{1}{24}$$

以上から、 $a_{n+1} = \frac{a_n}{n}$ が推定される。この推定が正しいことを、数学的帰納法により証明する。

この推定が正しいとすると

$$n! a_{n+1} = (n-1)! a_n \quad \therefore (n-1)! a_n = 0! a_1 = 1 \quad \therefore a_n = \frac{1}{(n-1)!} \quad \dots (*)$$

となる。以下、これを示す。

$n = 1$ で(*)は成り立つ。

また、ある n まで成り立つと仮定すると、

$$\frac{2^n}{n!} = a_1 a_{n+1} + a_{n+1} a_1 + \sum_{k=2}^n \frac{1}{(k-1)!} \cdot \frac{1}{(n+1-k)!}$$

$$\Leftrightarrow 2^n = 2n! a_{n+1} + \sum_{k=2}^n \frac{n!}{(k-1)! (n+1-k)!}$$

$$\Leftrightarrow 2n! a_{n+1} = 2^n - \sum_{k=2}^n n C_{k-1}$$

$$\Leftrightarrow 2n! a_{n+1} = 2^n - \left(\sum_{k=0}^n n C_k - n C_0 - n C_n \right)$$

$$\Leftrightarrow 2n! a_{n+1} = 2$$

$$\Leftrightarrow a_{n+1} = \frac{1}{n!}$$

よって、数学的帰納法の原理より、(*)が成り立つから、求める一般項 a_n は

$$a_n = \frac{1}{(n-1)!} \quad (\text{答})$$

【2】(1) 与漸化式より

$$\frac{1}{a_2} = \frac{1}{a_1} + \frac{1}{2b_1} = \frac{a_1 + 2b_1}{2a_1b_1}, \quad b_2 = \frac{1}{4}(a_1 + 2b_1)$$

であるから,

$$b_2 - a_2 = \frac{1}{4}(a_1 + 2b_1) - \frac{2a_1b_1}{a_1 + 2b_1} = \frac{(a_1 - 2b_1)^2}{4(a_1 + 2b_1)} > 0$$

$$b_1 - b_2 = b_1 - \frac{1}{4}(a_1 + 2b_1) = \frac{1}{4}(2b_1 - a_1) > 0$$

$\therefore a_2 < b_2 < b_1$ 【証明終】

(2) 数学的帰納法による.

(I) $n = 1$ のとき, (1) より $b_1 > b_2 > a_2$ だから, $b_1 > a_2$ より確かに成り立つ.

(II) $n = k$ で成立を仮定する.

(IH) $a_{k+1} < b_{k+1} < b_k$

示すべきことは $a_{k+2} < b_{k+2} < b_{k+1}$ である.

$n = k + 1$ のとき,

$$b_{k+2} - a_{k+2} = \frac{1}{4}(a_{k+1} + 2b_{k+1}) - \frac{2a_{k+1}b_{k+1}}{a_{k+1} + 2b_{k+1}} = \frac{(2b_{k+1} - a_{k+1})^2}{4(a_{k+1} + 2b_{k+1})} > 0$$

$$b_{k+1} - b_{k+2} = b_{k+1} - \frac{1}{4}(a_{k+1} + 2b_{k+1}) = \frac{1}{4}(2b_{k+1} - a_{k+1}) > 0$$

$\therefore a_{k+2} < b_{k+2} < b_{k+1}$

よって, (I), (II) と数学的帰納法の原理により, すべての n について

$$a_{n+1} < b_{n+1} < b_n \quad \therefore b_n > a_{n+1}$$

が成り立つ. 【証明終】

(3) (2) より, $\{b_n\}$ は減少数列であるから, $n \geq 2$ のとき, 明らかに

$$b_n < b_1 \quad \text{【証明終】}$$

【3】(1) α, β は 2 次方程式

$$x^2 - 4x - 1 = 0$$

の 2 解であるから、

$$\alpha^2 = 4\alpha + 1, \quad \beta^2 = 4\beta + 1$$

が成り立つ。

従って、これらの辺々にそれぞれ α^n, β^n をかけると

$$\alpha^{n+2} = 4\alpha^{n+1} + \alpha^n, \quad \beta^{n+2} = 4\beta^{n+1} + \beta^n$$

を得る。

辺々加えると、 $n \geq 1$ の下で

$$\alpha^{n+2} + \beta^{n+2} = 4(\alpha^{n+1} + \beta^{n+1}) + \alpha^n + \beta^n$$

となり、 s_n の定義から 3 項間漸化式

$$s_{n+2} = 4s_{n+1} + s_n$$

を得る。

s_1, s_2 を求めると

$$s_1 = \alpha + \beta = 4, \quad s_2 = \alpha^2 + \beta^2 = (\alpha + \beta)^2 - 2\alpha\beta = 4^2 - 2(-1) = 18$$

以上より、数列 $\{s_n\}$ を生成する漸化式は、 n を正整数として

$$\begin{cases} s_1 = 4, s_2 = 18 \\ s_{n+2} = 4s_{n+1} + s_n \end{cases} \quad (\text{答})$$

(2) β は 2 次方程式 $x^2 - 4x - 1 = 0$ の小さい方の解だから、

$$\beta = 2 - \sqrt{5}$$

である。 $2^2 < 5 < 3^2 \iff 2 < \sqrt{5} < 3$ であるから、

$$-1 < \beta < 0 \quad \therefore \quad -1 < \beta^3 < 0$$

が成り立ち、よって β^3 を越えない最大の整数は -1 である：

$$\lfloor \beta^3 \rfloor = -1 \quad (\text{答})$$

(3) $N = 2003$ とすると、求めるものは $\lfloor \alpha^N \rfloor$ の 1 の位の数である。

$s_N = \alpha^N + \beta^N$ より、

$$\alpha^N = s_N - \beta^N$$

である。ここで (2) で考察したように $-1 < \beta < 0$ であるから、正整数 n について

- n が偶数ならば $0 < \beta^n < 1$
- n が奇数ならば $-1 < \beta^n < 0$

である。

$N = 2003$ は奇数であるから $0 < -\beta^N < 1$ となり、

$$s_N < \alpha^N = s_N - \beta^N < s_N + 1 \quad \therefore \quad \lfloor \alpha^N \rfloor = s_N$$

従って、求める値は s_N の 1 の位の数である。

mod 10 を固定して、10 を法とする合同関係で考えると、(1) で得た漸化式を用いて、

$$s_1 \equiv 4, \quad s_2 \equiv 8, \quad s_3 \equiv 4 \cdot 8 + 4 \equiv 6, \quad s_4 \equiv 4 \cdot 6 + 8 \equiv 2,$$

$$s_5 \equiv 4 \cdot 2 + 6 \equiv 4, \quad s_6 \equiv 4 \cdot 4 + 2 \equiv 8, \quad \dots$$

となり、 s_n を 10 で割った余り、つまり s_n の 1 の位は

$$4, 8, 6, 2, 4, 8, 6, 2, \dots$$

という，周期 4 をもつ循環数列になることが推定される：

$$\text{推定： } s_{n+4} \equiv s_n$$

この推定が正しいことを，帰納法により示す．

(I) $n = 1, 2$ のとき，

$$s_5 \equiv s_1, \quad s_6 \equiv s_2$$

より成立．

(II) $n = k, k + 1$ で推定が正しいとする：

$$\text{(IH) : } s_{k+4} \equiv s_k, \quad s_{k+5} \equiv s_{k+1}$$

このとき，

$$s_{k+6} = 4s_{k+5} + s_{k+4} \equiv 4s_{k+1} + s_k = s_{k+2} \quad \therefore s_{k+6} \equiv s_{k+2}$$

よってこのときも推定は正しい．

(I), (II) より，任意の正整数 n について推定が正しいことが，数学的帰納法により示された．

従って， $N = 2003$ について

$$s_N \equiv s_{N-4} \equiv s_{N-8} \equiv \cdots \equiv s_3 \equiv 6$$

であるから，求める値は

$$[\alpha^{2003}] = 6 \quad (\text{答})$$

【4】(1) $a^2 = 1 + 2b^2$ より a^2 は奇数. よって, a も奇数である.

$a = 2n + 1$ (n は整数) と置くと,

$$(2n + 1)^2 = 1 + 2b^2 \iff 4n^2 + 4n = 2b^2$$

$$\therefore b^2 = 2n(n + 1)$$

よって, b^2 は偶数となり, b も偶数となる. [証明終]

(2) $a^2 - 2b^2 = 1$ において, $a = 2n + 1$, $b = 2m$ と置くと,

$$(2n + 1)^2 - 2(2m)^2 = 1$$

$$\iff 4n^2 + 4n - 8m^2 = 0$$

$$\iff n(n + 1) = 2m^2$$

$$\therefore m^2 = \frac{n(n + 1)}{2} = 1 + 2 + \dots + n$$

ここで, 左辺は平方数を表し, 右辺は 3 角数を示す.

また, $m^2 = \frac{b^2}{4}$ であることに注目すると, 正整数 a, b が $a^2 - 2b^2 = 1$ をみたすと

き, $\frac{b^2}{4}$ は平方 3 角数になる. (答)

(3) 正整数 k に対して,

$$\begin{aligned} a_{k+1} + b_{k+1}\sqrt{2} &= (3 + 2\sqrt{2})^{k+1} = (3 + 2\sqrt{2})^k(3 + 2\sqrt{2}) \\ &= (a_k + b_k\sqrt{2})(3 + 2\sqrt{2}) \\ &= (3a_k + 4b_k) + (2a_k + 3b_k)\sqrt{2} \end{aligned}$$

ここで, $a_k, b_k, a_{k+1}, b_{k+1}$ はすべて正整数, 従って有理数であり, また $\sqrt{2}$ は無理数だから,

$$a_{k+1} = 3a_k + 4b_k, \quad b_{k+1} = 2a_k + 3b_k \quad \dots\dots ①$$

が成り立つ. よって,

$$a_{k+1}^2 - 2b_{k+1}^2 = (3a_k + 4b_k)^2 - 2(2a_k + 3b_k)^2 = a_k^2 - 2b_k^2$$

これより, すべての正整数 k に対して, $a_k^2 - 2b_k^2$ は一定の値となるから,

$$\begin{aligned} a_k^2 - 2b_k^2 &= a_1^2 - 2b_1^2 \\ &= 3^2 - 2 \cdot 2^2 \quad (\because a_1 = 3, b_1 = 2) \\ &= 9 - 8 = 1 \quad (k = 1, 2, 3, \dots) \quad \text{[証明終]} \end{aligned}$$

(4) ① より,

$$b_{k+1} - b_k = 2a_k + 2b_k > 0 \quad (\because a_k, b_k \text{ は正整数})$$

が成り立つから,

$$b_1 < b_2 < b_3 < \dots \quad \dots\dots ②$$

一方, (2), (3) の結果より,

$$\frac{1}{4}b_k^2 \quad (k = 1, 2, 3, \dots)$$

はすべて平方 3 角数であるから, ② と合わせて, 平方 3 角数が無数に存在することが示された. [証明終]

添削課題

- 【1】(1) x_1 を 3 で割った余りは 2, y_1 を 3 で割った余りは 0 だから,
 x_n, y_n を 3 で割った余りは, それぞれ 2, 0 である…①*

と推測される.

これが正しいことを数学的帰納法で証明する.

(i) $n = 1$ のとき $x_1 = 2, y_1 = 6$ で成り立つ.

(ii) $n = k$ (k は自然数) のとき x_k, y_k を 3 で割った余りが, それぞれ 2, 0 であると仮定する.

$n = k + 1$ のとき x_k, y_k は, それぞれ l, m を整数として $x_k = 3l + 2,$

$y_k = 3m$ と表せるから

$$x_{k+1} = x_k + y_k = (3l + 2) + 3m = 3(l + m) + 2$$

$$y_{k+1} = 3x_k + y_k = 3(3l + 2) + 3m = 3(3l + m + 2)$$

よって, x_{k+1}, y_{k+1} を 3 で割った余りは, それぞれ 2, 0 である.

以上から, すべての自然数に対して ①* が成り立つ.

よって

$$x_n \text{ を } 3 \text{ で割った余りは } 2, y_n \text{ を } 3 \text{ で割った余りは } 0 \quad (\text{答})$$

- (2) 条件式より

$$y_n = x_{n+1} - x_n$$

であるから

$$y_{n+1} = x_{n+2} - x_{n+1}$$

これらを

$$y_{n+1} = 3x_n + y_n$$

に代入して

$$x_{n+2} - x_{n+1} = 3x_n + (x_{n+1} - x_n)$$

$$\therefore x_{n+2} - 2x_{n+1} - 2x_n = 0 \quad (n \geq 1)$$

特性方程式は $t^2 - 2t - 2 = 0$ であり, これより $t = 1 \pm \sqrt{3}$

そして, $x_1 = 2, x_2 = x_1 + y_1 = 2 + 6 = 8$ だから

$$\begin{cases} x_{n+2} - (1 + \sqrt{3})x_{n+1} = (1 - \sqrt{3})\{x_{n+1} - (1 + \sqrt{3})x_n\} \\ x_{n+2} - (1 - \sqrt{3})x_{n+1} = (1 + \sqrt{3})\{x_{n+1} - (1 - \sqrt{3})x_n\} \end{cases}$$

これより

$$x_{n+1} - (1 + \sqrt{3})x_n = -2\sqrt{3}(1 - \sqrt{3})^n \quad \dots\dots ①$$

$$x_{n+1} - (1 - \sqrt{3})x_n = 2\sqrt{3}(1 + \sqrt{3})^n \quad \dots\dots ②$$

① - ② から

$$-2\sqrt{3}x_n = -2\sqrt{3}\{(1 - \sqrt{3})^n + (1 + \sqrt{3})^n\}$$

$$\therefore x_n = (1 - \sqrt{3})^n + (1 + \sqrt{3})^n \quad (\text{答})$$

- (3) (2) より

$$(1 + \sqrt{3})^n = x_n - (1 - \sqrt{3})^n \quad (n \geq 1)$$

(1) より $x_n = 3k + 2$ (k は整数) と表せ, また, $-1 < 1 - \sqrt{3} < 0$ だから
 n が奇数のとき

$$0 < -(1 - \sqrt{3})^n < 1 \quad \therefore x_n < x_n - (1 - \sqrt{3})^n < x_n + 1$$

よって $z_n = x_n = 3k + 2$ だから z_n を 3 で割った余りは 2

n が偶数のとき

$$-1 < -(1 - \sqrt{3})^n < 0 \quad \therefore x_n - 1 < x_n - (1 - \sqrt{3})^n < x_n$$

よって, $z_n = x_n - 1 = (3k + 2) - 1 = 3k + 1$ だから z_n を 3 で割った余りは 1

以上より

n が奇数のとき 2, n が偶数のとき 1 (答)

19章 解析 (2)

問題

【1】(1) まず, $a_1 = \sin \theta_1$ とすると,

$$2 \sin \theta_1 = \sqrt{2} \iff \sin \theta_1 = \frac{1}{\sqrt{2}} \quad \therefore \theta_1 = \frac{\pi}{4}$$

また, $a_n = 2 \sin \theta_n, a_{n+1} = 2 \sin \theta_{n+1}$ として, 与えられた第2式により

$$2 \sin \theta_{n+1} = \sqrt{2 + 2 \sin \theta_n} = \sqrt{2(1 + \sin \theta_n)}$$

ここで, 単位円の直線 $y = x$ に関する対称性と, \cos の倍角公式により,

$$\begin{aligned} 1 + \sin \theta_n &= 1 + \cos \left(\frac{\pi}{2} - \theta_n \right) \\ &= 1 + 2 \cos^2 \left(\frac{\pi}{4} - \frac{\theta_n}{2} \right) - 1 \\ &= 2 \cos^2 \left(\frac{\pi}{4} - \frac{\theta_n}{2} \right) \end{aligned}$$

が成り立つから,

$$\begin{aligned} 2 \sin \theta_{n+1} &= \sqrt{2 \cdot 2 \cos^2 \left(\frac{\pi}{4} - \frac{\theta_n}{2} \right)} \\ &= 2 \cos \left(\frac{\pi}{4} - \frac{\theta_n}{2} \right) \\ &= 2 \sin \left\{ \frac{\pi}{2} - \left(\frac{\pi}{4} - \frac{\theta_n}{2} \right) \right\} \end{aligned}$$

従って,

$$\theta_{n+1} = \frac{\theta_n}{2} + \frac{\pi}{4}$$

を得る.

以上より, 数列 $\{\theta_n\}$ について, 漸化式

$$\begin{cases} \theta_1 = \frac{\pi}{4}, \\ \theta_{n+1} = \frac{1}{2}\theta_n + \frac{\pi}{4} \end{cases}$$

が得られた. これを解く. $\alpha = \frac{1}{2}\alpha + \frac{\pi}{4}$ として $\alpha = \frac{\pi}{2}$ であるから, 漸化式の第2式から辺々引いて

$$\theta_{n+1} - \frac{\pi}{2} = \frac{1}{2} \left(\theta_n - \frac{\pi}{2} \right)$$

従って, 数列 $\left\{ \theta_n - \frac{\pi}{2} \right\}$ は公比 $\frac{1}{2}$ の等比数列で, 初項は $\theta_1 - \frac{\pi}{2} = -\frac{\pi}{4}$ である.

よって第 n 項 θ_n は

$$\theta_n = -\frac{\pi}{4} \cdot \left(\frac{1}{2} \right)^{n-1} + \frac{\pi}{2} = \frac{\pi}{2} - \frac{\pi}{4} \left(\frac{1}{2} \right)^{n-1} \quad (\text{答})$$

(2) まず, 数列 $\{x_n\}$ は, どの項も 1 より小さいことを確認する. 初項 $x_0 = a < 1$ であり, また

$$x_n = \frac{1}{2 - x_{n-1}} < \frac{1}{2 - 1} = 1$$

であるから, 帰納的に, 任意の $n = 0, 1, 2, \dots$ について

$$x_n < 1$$

である.

与えられた漸化式の第2式により，特性方程式は

$$\alpha = \frac{1}{2-\alpha} \iff \alpha(2-\alpha) = 1 \iff \alpha^2 - 2\alpha + 1 = 0$$

であるから，漸化式の固有値 $\alpha = 1$ を得る．そこで，両辺から1を引いて

$$x_{n+1} - 1 = \frac{1}{2-x_n} - 1 = \frac{1-(2-x_n)}{2-x_n} = \frac{1}{2-x_n} (x_n - 1)$$

ここで $x_n - 1 = y_n \iff x_n = y_n + 1$ と置けば

$$y_{n+1} = \frac{1}{2-(y_n+1)} y_n = \frac{y_n}{-y_n+1}$$

既に表示したように，任意の非負整数 n について $x_n < 1$ であるから， $y_n = x_n - 1 < 1 - 1 = 0$ ，つまり $y_n \neq 0$ が言える．従ってこの式の両辺の逆数を作ることができて，

$$\frac{1}{y_{n+1}} = \frac{1}{y_n} - 1$$

よって数列 $\left\{ \frac{1}{y_n} \right\}$ は公差 -1 の等差数列である．初項 $\frac{1}{y_0}$ は

$$\frac{1}{y_0} = \frac{1}{x_0 - 1} = \frac{1}{a - 1}$$

であるから，

$$\frac{1}{y_n} = \frac{1}{a-1} + (-1) \cdot n = \frac{1-n(a-1)}{a-1} \quad \therefore y_n = \frac{a-1}{1-n(a-1)}$$

従って

$$x_n = y_n + 1 = \frac{a-1+1-n(a-1)}{1-n(a-1)} = \frac{a-n(a-1)}{1-n(a-1)} \quad (\text{答})$$

[2] いくつか記法上の約束しておく．

- n を正整数として，1 から n までの正整数の集合を E_n で表す
 $\therefore E_n = \{1, 2, 3, \dots, n\}$
- 有限集合 S について， $\#S$ で S の要素の個数を表す．
- 2項係数 ${}_nC_r$ を $\binom{n}{r}$ で表す．

(1) 順列における加法等式 ${}_nP_r = {}_{n-1}P_r + r \cdot {}_{n-1}P_{r-1}$

Proof 1) 一般に ${}_nP_r = \frac{n!}{(n-r)!}$ であることに着目して，右辺から左辺を導く．

$$\begin{aligned} (\text{右辺}) &= \frac{(n-1)!}{\{(n-1)-r\}!} + r \cdot \frac{(n-1)!}{\{(n-1)-(r-1)\}!} \\ &= \frac{(n-1)!}{(n-r-1)!} + r \cdot \frac{(n-1)!}{(n-r)!} \\ &= \frac{(n-r)(n-1)! + r(n-1)!}{(n-r)!} \\ &= \frac{\{(n-r)+r\}(n-1)!}{(n-r)!} \\ &= \frac{n \cdot (n-1)!}{(n-r)!} = \frac{n!}{(n-r)!} = {}_nP_r \quad [\text{証明終}] \end{aligned}$$

Proof 2) 集合 E_n から r 個をとって並べる順列全体からなる集合を P_n とすれば， $\#P_n = {}_nP_r$ である． P_n を次の2つの，互いに素な部分集合に分割する：

- E_n の要素 1 が現れない順列の集合を S_1 ,
- 1 が現れる順列の集合を S_2

とする.

S_1 は, 集合 E_n から 1 を除いた集合 $E_n - \{1\}$ の要素を r 個並べてできる順列全体の集合であり, $\#(E_n - \{1\}) = n - 1$ であるから,

$$\#S_1 = {}_{n-1}P_r$$

S_2 の要素は, 集合 $E_n - \{1\} = \{2, 3, \dots, n\}$ から $(r-1)$ 個をとって一列に並べてできる順列それぞれに, そのどこかに 1 を付け加えてできる順列である. $\{2, 3, \dots, n\}$ から $(r-1)$ 個をとる順列の個数は ${}_{n-1}P_{r-1}$ 個あり, 1 を付け加える場所は両端または隙間であるから r 通りある.

従って, 積の法則により

$$\#S_2 = r \cdot {}_{n-1}P_{r-1}$$

よって

$$\#P_n = \#S_1 + \#S_2 = {}_{n-1}P_r + r \cdot {}_{n-1}P_{r-1} \quad \text{【証明終】}$$

(2) 対称等式 $\binom{n}{r} = \binom{n}{n-r}$

一般に

$$\binom{n}{r} = \frac{{}_n P_r}{r!} = \frac{n!}{(n-r)!r!}$$

が成り立つ. これを用いると

$$(\text{左辺}) = \frac{n!}{r!(n-r)!}, \quad (\text{右辺}) = \frac{n!}{(n-r)!\{n-(n-r)\}!} = \frac{n!}{(n-r)!r!}$$

より成立. 【証明終】

(3) 吸収等式 $r \binom{n}{r} = n \binom{n-1}{r-1}$, (ただし $n \geq 1$).

Proof 1)

左辺から右辺を導く.

$$\begin{aligned} (\text{左辺}) &= r \cdot \frac{n!}{r!(n-r)!} \\ &= n \cdot \frac{(n-1)!}{(r-1)!(n-r)!} = n \binom{n-1}{r-1} = (\text{右辺}) \quad \text{【証明終】} \end{aligned}$$

Proof 2)

集合 $E_n = \{1, 2, \dots, n\}$ の r 元部分集合の個数は, 異なる n 個のものから r 個をとる組合せの個数に等しいから, その個数は $\binom{n}{r}$ 個ある.

いま, $j = 1, 2, \dots, n$ に関して, E_n からその要素 j を取り除いてできる集合を A_j と表す:

$$A_j = E_n - \{j\} = \{1, 2, \dots, j-1, j+1, \dots, n\}$$

任意の j について, 集合 A_j の $(r-1)$ 元部分集合の個数は, $(n-1)$ 個の異なるものから $(r-1)$ 個をとる組合せの個数になるから, それは $\binom{n-1}{r-1}$ 個ある.

ある j について、集合 A_j の $(r-1)$ 元部分集合それぞれに j を加えてできる集合を作ると、それは E_n の r 元部分集合で、これを $j = 1, 2, \dots, n$ すべてについて行くと、重複を許して全部で $n \binom{n-1}{r-1}$ 個できる。この中に、同じ集合が何度重複しているかを考える。

いま、特に E_n の r 元部分集合 $\{1, 2, \dots, r\}$ を考えると、この集合は

- A_1 の $(r-1)$ 元部分集合 $\{2, 3, \dots, r\}$ に 1 を加えてできる。
- A_2 の $(r-1)$ 元部分集合 $\{1, 3, \dots, r\}$ に 2 を加えてできる。
- ……
- A_r の $(r-1)$ 元部分集合 $\{1, 2, \dots, r-1\}$ に r を加えてできる。

という、 r 通りのでき方が考えられるから、重複度は r である。

これは一般に E_n の r 元部分集合 $\{a_1, a_2, \dots, a_r\}$ について成り立つから、すべての r 元部分集合は、重複度 r で、つまり、 r 回ずつ重複して数えて $n \binom{n-1}{r-1}$ 個ある。

従って

$$\binom{n}{r} = \frac{1}{r} \cdot n \binom{n-1}{r-1} \quad \therefore r \binom{n}{r} = n \binom{n-1}{r-1} \quad \text{【証明終】}$$

(4) 加法等式 $\binom{n}{r} = \binom{n-1}{r-1} + \binom{n-1}{r}$

Proof 1)

右辺から左辺を導く。

$$\begin{aligned} \text{(右辺)} &= \frac{(n-1)!}{(r-1)!(n-r)!} + \frac{(n-1)!}{r!(n-1-r)!} \\ &= \frac{(n-1)!r + (n-1)!(n-r)}{r!(n-r)!} \\ &= \frac{(n-1)!(r+n-r)}{r!(n-r)!} \\ &= \frac{n!}{r!(n-r)!} = \binom{n}{r} = \text{(左辺)} \quad \text{【証明終】} \end{aligned}$$

Proof 2)

E_n の r 元部分集合全体を考える。これを次の 2 つに類別する：

- 要素 1 を含む r 元部分集合は、 $E_n - \{1\}$ の $(r-1)$ 元部分集合に 1 を加えてできるから、その個数は $\binom{n-1}{r-1}$ 個ある。
- 要素 1 を含まない r 元部分集合は、 $E_n - \{1\}$ の r 元部分集合に他ならないからその個数は $\binom{n-1}{r}$ 個ある。

E_n の r 元部分集合の個数は、これらの和に等しいから、加法等式が成り立つ。 【証明終】

【3】 (1) n に関する数学的帰納法による.

(I) $n = 1$ のとき,

$$F_1(x) = (1+x)^2 = 1 + 2x + x^2$$

であるから, 確かに $F_1(x) = x$ とすれば題意の言う通りである.

(II) k を正整数として, $n = k$ のとき成立を仮定する. 数学的帰納法の仮定は, 次の (IH) である:

(IH): ある整数係数多項式 $P_k(x)$ が存在して

$$F_k(x) = (1+x)^{2^k} = 1 + 2P_k(x) + x^{2^k}$$

が成り立つ.

$n = k+1$ のとき, $2^{k+1} = 2^k \cdot 2$ に注意して

$$\begin{aligned} F_{k+1}(x) &= (x+1)^{2^{k+1}} = (1+x)^{2^k \cdot 2} = \left\{ (1+x)^{2^k} \right\}^2 = (F_k(x))^2 \\ &= \left(1 + 2P_k(x) + x^{2^k} \right)^2 \end{aligned}$$

以下で, $P_k(x)$ を単に P と略記すると

$$\begin{aligned} F_{k+1}(x) &= (F_k(x))^2 \\ &= \left(1 + 2P + x^{2^k} \right)^2 \\ &= 1 + 4P^2 + x^{2^{k+1}} + 4P + 4P \cdot x^{2^k} + 2x^{2^k} \\ &= 1 + 2 \left(2P^2 + 2P + 2P \cdot x^{2^k} + x^{2^k} \right) + x^{2^{k+1}} \end{aligned}$$

そこで,

$$2P^2 + 2P + 2P \cdot x^{2^k} + x^{2^k} = P_{k+1}(x)$$

と定めれば, 確かに整数係数多項式 $P_{k+1}(x)$ がこのときも存在する.

以上, (I), (II) より, 任意の正整数 n について整数係数多項式 $P_n(x)$ が存在して,

$$F_n(x) = 1 + 2P_n(x) + x^{2^n}$$

が成り立つ. 【証明終】

(2) 以下では, 2項係数 ${}_n C_r$ を $\binom{n}{r}$ と表す.

2項定理により

$$F_n(x) = (1+x)^{2^n} = \sum_{k=0}^{2^n} \binom{2^n}{k} x^k = 1 + \sum_{k=1}^{2^n-1} \binom{2^n}{k} x^k + 2^{2^n}$$

(1) より, 最右辺の第 2 項 $\sum_{k=1}^{2^n-1} \binom{2^n}{k} x^k$ は, 整数係数多項式 $P_n(x)$ の 2 倍, $2P_n(x)$ に恒等的に等しい:

$$\sum_{k=1}^{2^n-1} \binom{2^n}{k} x^k = 2P_n(x)$$

そこで, 両辺の x^k (ただし $k = 1, 2, \dots, 2^n - 1$) の係数を比べて, $k = 1, 2, \dots, 2^n - 1$ について, $\binom{2^n}{k}$ は偶数であることが示された. [証明終]

(3) 加法等式

$$\binom{N}{k-1} + \binom{N}{k} = \binom{N+1}{k}$$

において, $N = 2^n - 1$ とすれば

$$\binom{2^n-1}{k-1} + \binom{2^n-1}{k} = \binom{2^n}{k} \quad \therefore \binom{2^n-1}{k} = \binom{2^n}{k} - \binom{2^n-1}{k-1}$$

(2) より, $\binom{2^n}{k}$ が偶数であることが示されているから, $\binom{2^n-1}{k-1}$ が奇数ならば,

$\binom{2^n-1}{k}$ も奇数となる. そこで, k に関する数学的帰納法により示す.

(I) $k = 1$ のとき, $\binom{2^n}{1} = 2^n$ は偶数であり, また, $\binom{2^n-1}{0} = 1$ であるから,

$$\binom{2^n-1}{1} = \binom{2^n}{1} - \binom{2^n-1}{0} = 2^n - 1 \text{ は奇数となり, 成立.}$$

(II) p を $2^n - 1$ 以下の正整数として, $k = p$ で成立を仮定する:

(IH) 2 項係数 $\binom{2^n-1}{p}$ は奇数である.

$k = p + 1$ のとき, 加法公式により

$$\binom{2^n-1}{p+1} = \binom{2^n}{p+1} - \binom{2^n-1}{p}$$

であり, (2) より右辺の第 1 項は偶数, (IH) より第 2 項は奇数であるから, 左辺の $\binom{2^n-1}{p+1}$ は奇数である. よって $k = p + 1$ のときも成り立つ.

以上, (I), (II) により, $k = 1, 2, \dots, 2^n - 1$ について $\binom{2^n-1}{k}$ は奇数であることが示された. [証明終]

【4】(1) k は整数とする.

(i) $n = 3k$ のとき, $\omega^n = 1$ であるから,

$$\begin{aligned}\omega^{2n} + \omega^n + 1 &= 3, \\ (1 + \omega)^n + (1 + \omega^2)^n &= (-\omega^2)^n + (-\omega)^n \\ &= (-1)^n \omega^{2n} + (-1)^n \omega^n \\ &= 2(-1)^n\end{aligned}$$

(ii) $n = 3k + 1$ のとき, $\omega^n = \omega^{3k+1} = \omega$ より

$$\begin{aligned}\omega^{2n} + \omega^n + 1 &= \omega^2 + \omega + 1 = 0, \\ (1 + \omega)^n + (1 + \omega^2)^n &= (-\omega^2)^n + (-\omega)^n \\ &= (-1)^n (\omega^{2n} + \omega^n) \\ &= (-1)^n (-1) = (-1)^{n+1}\end{aligned}$$

(iii) $n = 3k + 2$ のとき, $\omega^n = \omega^{3k+2} = \omega^2$ より

$$\begin{aligned}\omega^{2n} + \omega^n + 1 &= \omega + \omega^2 + 1 = 0, \\ (1 + \omega)^n + (1 + \omega^2)^n &= (-\omega^2)^n + (-\omega)^n \\ &= (-1)^n (\omega^{2n} + \omega^n) \\ &= (-1)^n (-1) = (-1)^{n+1}\end{aligned}$$

以上より

$$\omega^{2n} + \omega^n + 1 = \begin{cases} 3 & (3 \mid n) \\ 0 & (3 \nmid n) \end{cases}, \quad (1 + \omega)^n + (1 + \omega^2)^n = \begin{cases} 2(-1)^n & (3 \mid n) \\ (-1)^{n+1} & (3 \nmid n) \end{cases}$$

(答)

(2) $\sum_{k=0}^n {}_{3N}C_{3k} = S$ と置く. 2項定理より

$$(1 + x)^n = \sum_{r=0}^n {}_n C_r x^r \dots\dots (*)$$

(*) で $n = 3N$, $x = \omega$ とすれば,

$$(1 + \omega)^{3N} = \sum_{r=0}^{3N} {}_{3N}C_r \omega^r \dots\dots \textcircled{1}$$

(*) で $n = 3N$, $x = \omega^2$ とすれば,

$$(1 + \omega^2)^{3N} = \sum_{r=0}^{3N} {}_{3N}C_r \omega^{2r} \dots\dots \textcircled{2}$$

(1) の (i) より, ①, ② の辺々を加えると

$$(\text{左辺}) = (1 + \omega)^{3N} + (1 + \omega^2)^{3N} = 2(-1)^N$$

右辺は

$$\begin{aligned}
 & \sum_{r=0}^{3N} 3N C_r \omega^r + \sum_{r=0}^{3N} 3N C_r \omega^{2r} \\
 = & \sum_{k=0}^N 3N C_{3k} (\omega^{3k} + \omega^{6k}) + \sum_{k=0}^{N-1} 3N C_{3k+1} (\omega^{3k+1} + \omega^{6k+2}) \\
 & + \sum_{k=0}^{N-1} 3N C_{3k+2} (\omega^{3k+2} + \omega^{6k+4}) \\
 = & 2 \sum_{k=0}^N 3N C_{3k} + (\omega^2 + \omega) \sum_{k=0}^{N-1} (3N C_{3k+1} + 3N C_{3k+2}) \cdots \cdots (\star)
 \end{aligned}$$

第2項は $-\sum_{k=0}^{N-1} (3N C_{3k+1} + 3N C_{3k+2})$ だから、

$$\begin{aligned}
 (\star) &= 3 \sum_{k=0}^N 3N C_{3k} - \left(\sum_{k=0}^N 3N C_{3k} + \sum_{k=0}^{N-1} 3N C_{3k+1} + \sum_{k=0}^{N-1} 3N C_{3k+2} \right) \\
 &= 3 \sum_{k=0}^N 3N C_{3k} - \sum_{r=0}^{3N} 3N C_r \\
 &= 3 \sum_{k=0}^N 3N C_{3k} - (1+1)^{3N}
 \end{aligned}$$

$$\therefore 2(-1)^N = 3S - 2^{3N} \text{ より, } S = \frac{1}{3} \{2^{3N} + 2(-1)^N\} \quad (\text{答})$$

【5】 (1) 与えられた2次方程式を解けば、

$$\gamma_+ = \frac{1+\sqrt{5}}{2}, \quad \gamma_- = \frac{1-\sqrt{5}}{2}$$

である. $f_1 = f_2 = 1$, $f_{n+2} = f_{n+1} + f_n$ で生成される数列 (これを「Fibonacci 数列」と呼ぶ) の一般項 f_n が、

$$f_n = \frac{\gamma_+^n - \gamma_-^n}{\sqrt{5}}$$

で得られることを、 n に関する数学的帰納法により示す.

(I) $n = 1, 2$ のとき.

• $n = 1$ ならば

$$\frac{\gamma_+ - \gamma_-}{\sqrt{5}} = \frac{\sqrt{5}}{\sqrt{5}} = 1 = f_1$$

で成立.

• $n = 2$ ならば

$$\frac{\gamma_+^2 - \gamma_-^2}{\sqrt{5}} = \frac{(\gamma_+ + \gamma_-)(\gamma_+ - \gamma_-)}{\sqrt{5}} = \frac{1 \cdot \sqrt{5}}{\sqrt{5}} = 1 = f_2$$

で成立.

(II) $n = k, k + 1$ で成立を仮定する :

$$(IH): f_k = \frac{\gamma_+^k - \gamma_-^k}{\sqrt{5}}, \quad f_{k+1} = \frac{\gamma_+^{k+1} - \gamma_-^{k+1}}{\sqrt{5}}$$

$n = k + 2$ のとき, 与えられた漸化式により

$$\begin{aligned} f_{k+2} &= f_{k+1} + f_k = \frac{1}{\sqrt{5}} (\gamma_+^{k+1} - \gamma_-^{k+1} + \gamma_+^k - \gamma_-^k) \\ &= \frac{1}{\sqrt{5}} \{ \gamma_+^k (\gamma_+ + 1) - \gamma_-^k (\gamma_- + 1) \} \quad \cdots (\#) \end{aligned}$$

ここで, γ_+ と γ_- は 2 次方程式 $t^2 - t - 1 = 0$ の解であるから,

$$\begin{cases} \gamma_+^2 - \gamma_+ - 1 = 0 \\ \gamma_-^2 - \gamma_- - 1 = 0 \end{cases} \iff \begin{cases} \gamma_+ + 1 = \gamma_+^2 \\ \gamma_- + 1 = \gamma_-^2 \end{cases}$$

が成り立つ. よって (#) より

$$f_{k+2} = \frac{1}{\sqrt{5}} (\gamma_+^k \cdot \gamma_+^2 - \gamma_-^k \cdot \gamma_-^2) = \frac{\gamma_+^{k+2} - \gamma_-^{k+2}}{\sqrt{5}}$$

となり, $n = k + 2$ のときも成立.

以上 (I), (II) より, 任意の正整数 n について $f_n = \frac{\gamma_+^n - \gamma_-^n}{\sqrt{5}}$ [証明終]

(2) 1, 0 からできる数 X_n に現れる 0 の個数を α_n , 1 の個数を β_n と定めれば, X_n の桁数 a_n は

$$a_n = \alpha_n + \beta_n$$

である.

X_n から X_{n+1} を作る時, 0 は 1 に, 1 は 10 になるから, X_{n+1} に現れる 0, 1 について

- X_{n+1} における 0 の個数は X_n の 1 の個数に等しく, $\alpha_{n+1} = \beta_n$
- X_{n+1} における 1 の個数は X_n の 0 の個数と 1 の個数の和になり,

$$\beta_{n+1} = \alpha_n + \beta_n$$

従って, 次の連立漸化式が成り立つ :

$$\begin{cases} \alpha_{n+1} = \beta_n \\ \beta_{n+1} = \alpha_n + \beta_n \end{cases}$$

これから

$$\begin{aligned} a_{n+2} &= \alpha_{n+2} + \beta_{n+2} \\ &= \beta_{n+1} + (\alpha_{n+1} + \beta_{n+1}) \\ &= (\alpha_n + \beta_n) + (\alpha_{n+1} + \beta_{n+1}) \\ &= a_{n+1} + a_n \end{aligned}$$

従って数列 $\{a_n\}$ は、Fibonacci 数列 $\{f_n\}$ の漸化式と同じ漸化式によって生成される。ただし、 $a_1 = 1$, $a_2 = 2$ であるから、初期条件が異なり、 $a_n = f_{n+1}$ である。よって求める a_n は

$$a_n = \frac{\gamma_+^{n+1} - \gamma_-^{n+1}}{\sqrt{5}} \quad (\text{答})$$

- (3) X_n は 1 と 10 を並べてできる文字列と考えられるから、0 が連続して現れることはない。また、末尾以外の 0 には必ず 1 が続くから、

文字列 “01” が表れる回数は、末尾以外の 0 の個数に等しい。……(☆)

また、問題文で与えられた X_n の例から推定されるように、

n が奇数ならば末尾は 1 であり、 n が偶数ならば末尾は 0 である。……(†)

推定 (†) が正しいことは、帰納的に次のように示される：

- $X_1 = 1$ であるから、 $k = 1$ で成立。
- k が奇数ならば、その末尾の 1 は X_{k+1} では “10” になるから、 X_{k+1} の末尾は 0 で、 $k + 1$ は偶数。
- $k + 1$ が偶数ならば、その末尾の 0 は X_{k+2} では 1 になるから、 X_{k+2} の末尾は 1 で、 $k + 2$ は奇数。

よって、末尾以外の 0 の個数 b_n は (2) で定めた 0 の個数を表す α_n を用いて、(☆) から

- n が奇数ならば、 $b_n = \alpha_n$
- n が偶数ならば、 $b_n = \alpha_n - 1$

である。

(2) で定めた α_n , β_n について $\alpha_{n+1} = \beta_n$, $\beta_{n+1} = \alpha_n + \beta_n$ であるから、

$$\alpha_{n+2} = \beta_{n+1} = \alpha_n + \beta_n = \alpha_n + \alpha_{n+1}$$

となり、 α_n も Fibonacci 数列 $\{f_n\}$ の漸化式によって生成される。ただし、初期条件について、

$$\alpha_1 = 0, \alpha_2 = 1 = f_1, \alpha_3 = 1 = f_2$$

であるから、 $n \geq 2$ の下で

$$\alpha_n = f_{n-1} = \frac{\gamma_+^{n-1} - \gamma_-^{n-1}}{\sqrt{5}}$$

が成り立つ。

この式で、 $n = 1$ とすると、右辺の値は 0 となり、これは $b_1 = 0$ に一致する。

以上より次が成り立つ：

$$b_n = \begin{cases} \alpha_n & = \frac{\gamma_+^{n-1} - \gamma_-^{n-1}}{\sqrt{5}} & (\text{ただし } 2 \nmid n) \\ \alpha_n - 1 & = \frac{\gamma_+^{n-1} - \gamma_-^{n-1}}{\sqrt{5}} - 1 & (\text{ただし } 2 \mid n) \end{cases} \quad (\text{答})$$

添削課題

【1】(1) (i) $1 \leq i \leq k-1$ のとき

$$P(X = i) = 0$$

(ii) $i \geq k$ のとき

$X = i$ となるのは、番号 1～番号 $(i-1)$ の玉から $(k-1)$ 個と、番号 i の玉との計 k 個を取り出す場合だから、その数は ${}_{i-1}C_{k-1}$ 通り.

n 個の玉から k 個取り出す場合の数は ${}_nC_k$ 通り.

これらは同様に確からしいので、

$$P(X = i) = \frac{{}_{i-1}C_{k-1}}{{}_nC_k}$$

したがって、

$$P(X = i) = \begin{cases} 0 & (1 \leq i \leq k-1) \\ \frac{{}_{i-1}C_{k-1}}{{}_nC_k} & (k \leq i \leq n) \end{cases} \quad (\text{答})$$

(2) $m+l-1 = u$ とすると、証明すべき式は

$$\sum_{i=1}^m ({}_{i+l-1}C_l \cdot l!) = {}_{m+l}C_{l+1} \cdot l!$$

すなわち

$$\sum_{i=l}^u {}_iC_l = {}_{u+1}C_{l+1}$$

と変形できるから、これが成り立つことを示す.

ここで

$${}_iC_l = {}_{i+1}C_{l+1} - {}_iC_{l+1}$$

だから

$$\sum_{i=l}^u {}_iC_l = \sum_{i=l+1}^{u+1} {}_iC_{l+1} - \sum_{i=l}^u {}_iC_{l+1} = {}_{u+1}C_{l+1}$$

となり、題意は示された。 [証明終]

20章 解析 (3)

問題

【1】(1) $f(x) = mx^3 + nx^2 - 1$ と置くと

$$f'(x) = 3mx^2 + 2nx = x(3mx + 2n)$$

$n > m > 2$ より, $f(x)$ の増減は次の表のようになる:

x	...	$-\frac{2n}{3m}$...	0	...
$f'(x)$	+	0	-	0	+
$f(x)$	↗		↘		↗

この増減表より, 極小値は

$$f(0) = -1 < 0$$

であり, また極大値は

$$f\left(-\frac{2n}{3m}\right) = \frac{4n^3 - 27m^2}{27m^2}$$

である.

ここで, m, n は整数で, $n > m > 2$ であるから

$$\begin{aligned} 4n^3 - 27m^2 &\geq 4(m+1)^3 - 27m^2 \\ &= 4m^3 - 15m^2 + 12m + 4 \\ &= (m-2)^2(4m+1) > 0 \end{aligned}$$

が成り立ち, よって極大値は正である.

従って, 3次方程式 $mx^3 + nx^2 - 1 = 0$ は異なる3つの実数解をもつ. [証明終]

(2) (1) の増減表から

$$\alpha < \beta < 0 < \gamma$$

である. よって

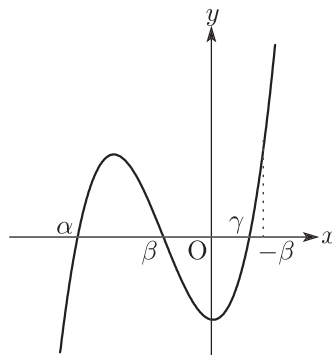
$$|\alpha| = -\alpha, |\beta| = -\beta, |\gamma| = \gamma$$

であり

$$|\beta| < |\alpha|$$

が成り立つ.

図1 : $y = f(x)$



さらに

$$f(\beta) = m\beta^3 + n\beta^2 - 1 = 0$$

より

$$\begin{aligned} f(-\beta) &= -m\beta^3 + n\beta^2 - 1 \\ &= -2m\beta^3 \\ &> 0 \quad (\because m > 0, \beta < 0) \end{aligned}$$

であるから, $y = f(x)$ のグラフより

$$\gamma < -\beta \iff |\gamma| < |\beta|$$

が成り立つ. 以上より

$$|\gamma| < |\beta| < |\alpha| \quad (\text{答})$$

【2】 $(x^n)' = nx^{n-1}$ より, 与えられた $f(x)$ について明らかに

$$f'_n(x) = f_{n-1}(x) \quad \cdots \cdots \textcircled{1}$$

まず, 方程式 $f_1(x) = 1 + x = 0$ はただ 1 つの負の解 -1 をもつ. そこで奇数次の方程式

$$f_{2k-1}(x) = 0$$

がただ 1 つの負の解 α をもつと仮定すると

$$x \rightarrow \pm\infty \text{ のとき } f_{2k}(x) \rightarrow +\infty$$

であり, かつ $\textcircled{1}$ により,

$$f'_{2k}(x) = 0$$

がただ 1 つの負の解 α をもつから, $f_{2k}(x)$ は $x = \alpha$ で極小となる.

関数 $f_{2k}(x)$ について, 与えられた定義式から

$$f_{2k}(x) = f_{2k-1}(x) + \frac{x^{2k}}{(2k)!}$$

が成り立つ. よって $f_{2k-1}(\alpha) = 0$, $\alpha \neq 0$ から

$$f_{2k}(\alpha) = f_{2k-1}(\alpha) + \frac{\alpha^{2k}}{(2k)!} = \frac{\alpha^{2k}}{(2k)!} > 0 \quad \therefore f_{2k}(x) > 0$$

これを $\textcircled{1}$ と合わせれば

$$f'_{2k+1}(x) > 0$$

であるから, $f_{2k+1}(x)$ は増加関数である. よって,

$$x \rightarrow -\infty \text{ のとき } f_{2k+1}(x) \rightarrow -\infty$$

であり, また

$$f_{2k+1}(0) = 1 > 0$$

より, 方程式 $f_{2k+1}(x) = 0$ はただ 1 つの負の解をもつ.

以上から数学的帰納法により, 任意の正整数 k に対して, 方程式 $f_{2k-1}(x) = 0$ はただ 1 つの負の解をもち, また $f_{2k}(x) > 0$ が任意の実数 x で成り立つから, 方程式 $f_{2k}(x) = 0$ は実数解をもたない.

すなわち, 題意は証明された. 【証明終】

【3】(1) $f'(x) = 3x^2 - \frac{5}{3}$ だから $P\left(t, t^3 - \frac{5}{3}t\right)$ における接線の傾きは $3t^2 - \frac{5}{3}$. よって

$$3t^2 - \frac{5}{3} \neq 0 \text{ のとき, 法線の傾きは}$$

$$-\frac{1}{3t^2 - \frac{5}{3}} = \frac{-3}{9t^2 - 5} \quad \therefore n: y = \frac{-3}{9t^2 - 5}(x - t) + t^3 - \frac{5}{3}t \quad (\text{答})$$

$3t^2 - \frac{5}{3} = 0$ のとき, すなわち, $t = \pm \frac{\sqrt{5}}{3}$ のとき, 法線 n の方程式は

$$x = \pm \frac{\sqrt{5}}{3} \quad (\text{複号同順}) \quad (\text{答})$$

(2) $3t^2 - \frac{5}{3} = 0$ のとき, 法線 n は曲線 C に接しない。そこで, $3t^2 - \frac{5}{3} \neq 0$ のもとで, (1) で求めた法線 n が, 曲線 C と接するような t の値を求める。図 2 を参照せよ。

$$x^3 - \frac{5}{3}x = \frac{-3}{9t^2 - 5}(x - t) + t^3 - \frac{5}{3}t$$

$$\iff x^3 - t^3 + \frac{3}{9t^2 - 5}(x - t) - \frac{5}{3}(x - t) = 0$$

$x \neq t$ の下で両辺を $x - t$ で割って

$$x^2 + tx + t^2 + \frac{3}{9t^2 - 5} - \frac{5}{3} = 0 \quad \dots\dots(\#)$$

x の方程式 (#) が重解をもつから, その判別式 $D = 0$ となり,

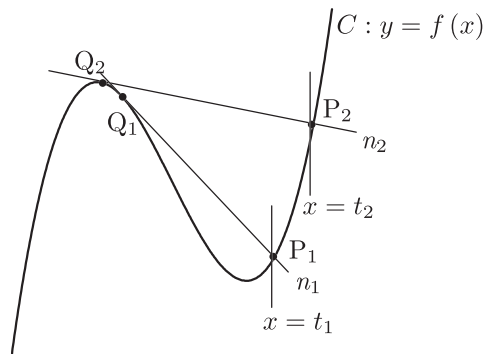
$$D = t^2 - 4\left(t^2 + \frac{3}{9t^2 - 5} - \frac{5}{3}\right) = 0 \iff -3t^2 - \frac{12}{9t^2 - 5} + \frac{20}{3} = 0$$

$$\iff 81t^4 - 225t^2 + 136 = 0 \iff (9t^2 - 8)(9t^2 - 17) = 0$$

$$\therefore t = \pm \frac{2\sqrt{2}}{3}, \pm \frac{\sqrt{17}}{3} \quad (\text{答})$$

(3) $t_1 = \frac{2\sqrt{2}}{3}, t_2 = \frac{\sqrt{17}}{3}$ で図 2 のようになる。

図 2 : 法線が接線になる



一般に, 次の積分計算が成り立つ:

$$\int_{\alpha}^{\beta} (x - \alpha)^2(x - \beta) dx = \int_{\alpha}^{\beta} (x - \alpha)^2\{(x - \alpha) + (\alpha - \beta)\} dx$$

$$= \int_{\alpha}^{\beta} (x - \alpha)^3 dx + (\alpha - \beta) \int_{\alpha}^{\beta} (x - \alpha)^2 dx$$

$$\begin{aligned}
&= \left[\frac{1}{4}(x-\alpha)^4 \right]_{\alpha}^{\beta} + (\alpha-\beta) \left[\frac{1}{3}(x-\alpha)^3 \right]_{\alpha}^{\beta} \\
&= \frac{1}{4}(\beta-\alpha)^4 - \frac{1}{3}(\beta-\alpha)^4 \\
&= -\frac{1}{12}(\beta-\alpha)^4
\end{aligned}$$

従って、3次の係数が a である3次関数 $y = g(x)$ と直線 l が $(\alpha, g(\alpha))$ で接し、かつ $(\beta, g(\beta))$ で交わる時、 $y = g(x)$ のグラフと l で囲まれる部分の面積 s は

$$s = \frac{|a|}{12}(\beta-\alpha)^4$$

と表される。

問題にもどり、(＃)の重解は $x = -\frac{t}{2}$ であるから、 P_1Q_1 と C で囲まれる部分の

面積 s_1 、および P_2Q_2 と C で囲まれる部分の面積 s_2 は

$$s_1 = \frac{1}{12} \left\{ t_1 - \left(-\frac{1}{2}t_1 \right) \right\}^4 = \frac{1}{12} \left(\frac{3}{2}t_1 \right)^4 = \frac{27}{64}t_1^4$$

$$s_2 = \frac{1}{12} \left\{ t_2 - \left(-\frac{1}{2}t_2 \right) \right\}^4 = \frac{1}{12} \left(\frac{3}{2}t_2 \right)^4 = \frac{27}{64}t_2^4$$

よって、求める面積 S は

$$S = \frac{27}{64}t_2^4 - \frac{27}{64}t_1^4 = \frac{27}{64} \cdot \frac{17^2 - 8^2}{3^4} = \frac{75}{64} \quad (\text{答})$$

【4】 与式は t に関する積分であり、 t にとって x は無関係な定数であるから、

$$f_n(x) = 3x^2 \int_0^1 t f'_{n-1}(t) dt + 3 \int_0^1 f_{n-1}(t) dt$$

と変形できる。ここで

$$a_n = 3 \int_0^1 t f'_{n-1}(t) dt$$

$$b_n = 3 \int_0^1 f_{n-1}(t) dt$$

と置くと、

$$f_n(x) = a_n x^2 + b_n \quad (n \geq 2)$$

$$f_1(x) = 4x^2 + 1 \text{ より,}$$

$$a_1 = 4, \quad b_1 = 1$$

これより、

$$a_n = 3 \int_0^1 t(2a_{n-1}t) dt = 2a_{n-1}$$

$$\therefore a_n = 4 \cdot 2^{n-1} = 2^{n+1} \quad \dots \textcircled{1}$$

また、

$$b_n = 3 \int_0^1 (a_{n-1}t^2 + b_{n-1}) dt = a_{n-1} + 3b_{n-1} = 2^n + 3b_{n-1} \quad (\because \textcircled{1})$$

$$\therefore \frac{b_n}{3^n} = \left(\frac{2}{3} \right)^n + \frac{b_{n-1}}{3^{n-1}}$$

n を $n+1$ にして、階差数列を作れば

$$\frac{b_{n+1}}{3^{n+1}} - \frac{b_n}{3^n} = \left(\frac{2}{3} \right)^{n+1}$$

$$\therefore \frac{b_n}{3^n} = \frac{b_1}{3} + \sum_{k=1}^{n-1} \left(\frac{2}{3}\right)^{k+1} = \frac{1}{3} + \left(\frac{2}{3}\right)^2 \frac{1 - \left(\frac{2}{3}\right)^{n-1}}{1 - \frac{2}{3}}$$

従って

$$\begin{aligned} b_n &= 3^{n-1} + 3^n \left(\frac{4}{3} - \frac{4}{3} \cdot \frac{2^{n-1}}{3^{n-1}} \right) \\ &= 3^{n-1} + 4 \cdot 3^{n-1} - 2^{n+1} \\ &= 5 \cdot 3^{n-1} - 2^{n+1} \end{aligned}$$

以上より

$$f_n(x) = 2^{n+1} \cdot x^2 + 5 \cdot 3^{n-1} - 2^{n+1} \quad (\text{答})$$

添削課題

【1】 C' の方程式は

$$y = (x - a)^3 + a$$

であり, C と C' の交点の x 座標は

$$(x - a)^3 + a = x^3$$

$$3x^2 - 3ax + a^2 - 1 = 0 \dots\dots \textcircled{1}$$

の実数解だから, 異なる 2 点で交わる条件は,

$$9a^2 - 12(a^2 - 1) > 0 \quad \therefore a^2 < 4$$

$a > 0$ に注意すると

$$0 < a < 2 \quad (\text{答})$$

このとき, $\textcircled{1}$ の解を α, β ($\alpha < \beta$) とすると

$$3x^2 - 3ax + a^2 - 1 = 3(x - \alpha)(x - \beta)$$

だから, C と C' の囲む図形の面積 S は

$$S = \int_{\alpha}^{\beta} \{(x - a)^3 + a - x^3\} dx = -3a \int_{\alpha}^{\beta} (x - \alpha)(x - \beta) dx = \frac{a(\beta - \alpha)^3}{2}$$

$$\alpha + \beta = a, \quad \alpha\beta = \frac{a^2 - 1}{3} \text{ より}$$

$$(\beta - \alpha)^2 = a^2 - \frac{4}{3}(a^2 - 1) = \frac{4 - a^2}{3}$$

だから

$$S = \frac{a(4 - a^2)^{\frac{3}{2}}}{6\sqrt{3}} \quad (\text{答})$$

S が最大になるのは

$$(6\sqrt{3}S)^2 = a^2(4 - a^2)^3$$

が最大になる場合である. そこで $t = 4 - a^2$ とすると

$$f(t) = a^2(4 - a^2)^3 = (4 - t)t^3 = 4t^3 - t^4 \quad (0 < t < 4)$$

であり

$$f'(t) = 12t^2 - 4t^3 = 4t^2(3 - t)$$

だから, $f(t)$ の増減表は次のようになる.

t	0		3		4
$f'(t)$		+	0	-	
$f(t)$		↗	最大	↘	

よって, $t = 3$ つまり $a = 1$ のとき最大で, S の最大値は $\frac{1}{2}$ (答)

M3JSB/M3JB/M3TB
選抜東大クラス文系数学
東大文系数学
難関大文系数学 T



会員番号	
------	--

氏名	
----	--